

次郎全集
源氏物語の成立

桜楓社

風巻景次郎全集第4巻 源氏物語の成立

昭和四十四年十一月二十日 印刷
昭和四十四年十一月二十五日 発行

定価 二八〇〇円

著者 風巻景次郎

編集 北海道大学国文学会

発行者 及川篤二

印刷所 三協美術印刷KK

東京都千代田区猿樂町二―二一六

桜楓社

電話(〇三)二九一―五六六〇(二)
振替 東京 一八〇二〇

風卷景次郎全集

第四卷

目次

源氏物語の成立

第一部 源氏物語成立論

二 描写・小説・源氏物語

六 源氏物語の時代的特質

七 源氏物語の精神

八 源氏物語の思い出——その読み方に触れて——

*

源氏物語の成立に関する試論

四 新旧の年立・並びの巻・五十四帖の外の巻

五 「玉かつら」とその並びの巻・「桜人」

六 「帚木」とその並びの巻・「輝く日の宮」

七 源氏物語の短篇性の再吟味・「耀く日の宮」の存在した必然性

八 欠巻「耀く日の宮」をめぐる問題

九 紫と紫のゆかりの物語

一〇 紫の上と明石の上との物語

一一 四年間の休業の後、この試論を再開するについての口上

*

三三六 耀く日の宮

二四八 藤壺の女御 かがやく日の宮——源氏物語出發のあたりの主題——

*

二四九 源氏物語（国語と文学の教室）

第二部 平安文学・展望と点描

二七 中古の文学

三五四 「平安文学の時期区分」について

三六四 平安時代の女流文化

三七三 モデルの問題

三八一 伊勢物語の文芸性——歌物語の歌と散文——

三九三 王朝美の形成——枕草紙論——

三九六 枕草子

書評

四〇〇 『建春門院中納言日記新解』に就きて

四〇三 王朝物語論——池田亀鑑『物語文学』・三谷栄一『物語文学史論』——

四〇五 中村真一郎『王朝の文学』——深い内面的な触れ合い——

第三部 日本の風土と美意識

四〇九	日本の風土〔国文学の素材と風土〕
四二四	風景の成立〔日本文芸における風景の成立〕
四三二	風土の北と南〔信州の風土〕
四四〇	日本の風景

*

四四四	風雅集と牧溪
四四六	中世に於ける新しき風景の成立
四五九	歌はなにかから放たれたならば

*

四六五	若月の眉
四七四	三日月の眉

第四部 桜 桃 攷

四八一	さくらんぼ
四八三	桜桃攷——ははか・かには・かには桜・かば桜・白樺・ゆすらうめ——
五五五	続桜桃攷——カニハサクラ・カハサクラ・カニハ・カハ考——

五五	解説	（総論）	平安文学研究における風巻さん
五七	解説	（各論）	風土と平安文学の中で
五九	解題	（山根対助）	

阿部秋生
高橋和夫

凡 例

校訂上の処置は次の指針によった。

一、本文を現代かなづかいに統一し、ほぼ「昭和三四・七・一一内閣告示第一号」に準拠して送りかなを加えるほか、副詞・連体詞・接統詞・形式体言・代名詞等の漢字表記を適宜ひらがなにあらためる。

一、本文は、単行書再録の際に著者によって改題補訂を加えられた場合、補訂本文に拠る。補訂箇所のうち、単純な修辭上の異同はとくに指摘せず、注意されるものは*または*₁…*_nの傍注で指示し、各篇末尾に「(ページ数) *「補訂本文」↑「初出本文」」のかたちで掲げる。その他必要に応じて補注・校注を加える場合も、右の形態で指示する。

一、本文の明白な誤脱は訂し、著者の記憶違いなどの単純な錯誤は訂正した上で校注し、決定できない語句にはママを傍注する。

一、各篇末尾に『初出誌』掲載年月・『収録単行書』を記し、改題の場合、原題名も示す。

一、欧米の国・地名の漢字表記は片仮名にあらため、引用作品名に『』を付す。

第一部 源氏物語成立論

描写・小説・源氏物語

子どものころに、小説をぬすみ読みした思い出によると、少年の心理は自然の描写や心理の描写から忘れられぬ印象をうけるということがないらしいと思う。子どもの記憶が曖昧なためでなく、本来まだそういったものを受容する性質が完成しておらぬためだと見るべきものらしい。

だから『西遊記』や『三国志』や『漢楚軍談』などが非常におもしろかったし、少年読物風にした『イリアッド』や『オディッセイ』やが非常におもしろいものであった。同時にアンデルセンやグリムのお伽ばなしと押川春浪の探偵冒險小説とに夢中になれたのだった。要は自然や心理やの風景が理解の上に何物を加えなくても十分におもしろかったからである。ひらたくいえば筋につられて読めたからである。『水滸伝』などはいまでも非常におもしろく、銷夏の読み物には持ってこいのものだし、『イリアッド』や『オディッセイ』もそうだが、もう『漢楚軍談』でもないといった気持である。

そのくせそれらの作品に自然の記事などが全くないというのでは決してない。『弓張月』の崇徳院御陵のところや、『太平記』に大塔宮の熊野へ落ちられるところなど、なか／＼のいわゆる美文調で、中学三四年のころになると、『自然と人生』の文章や、『前後赤壁賦』などと一緒に暗記したものであった。『三国志』中の五丈原の記事は、土井晩翠氏の『星落秋風五丈原』などと一緒にして、やはりそのころ暗記をこころみたものの一つであった。おそらくそれは、

自然描写の美事さというよりは、自然を述べる文章の音楽的な調子のよろしさが、快感をそそいたのである。けれども小学四年ころに父の目をしのんで読んだころには、そうした箇所は一つとして私の印象に残らなかったのが事実である。

現在日本の諸地方に語られている昔話が、いずれも自然描写を要素にしていないこともいわれのあることで、日本の物語の祖であると『源氏物語』にわざわざ記されている『竹取物語』の調子が、一種そうした民間伝承の説話の形態を色濃くのこしていることも、もっとも思いあわされる。和辻博士が以前に『竹取』は小説でなくて、お伽ばなしとして見るべきだといわれたが、その言葉の曖昧さは著しいにしても、暗示的には『竹取』の一面の性質を捕え得ているともいえる。

おはなしを好む社会的な心と、一人の人間の生理的社会的生長のある時期において、おはなしを好むという心理的事実とを比べると、ある類似が認められるようである。文筆の影響を蒙ることの甚大な階層の人々にあって、田舎の伝承や竹取風の物語やに心ひかれる年齢の存するのが事実である。そして、それらの段階における表現上の特色は、心理や自然やの描写を持っていない、万事は叙述に終始しているということである。叙述という言葉はなにかがすでに文章のわざに関係が付き過ぎたもののように聞こえるが、そのつもりで用いるのではなく、すべて語りのべられる調子をもつことをいったのである。

その頭で見れば、『伊勢物語』でも『大和物語』でも、まだ伝承文芸のすがたを濃過ぎる位にとどめている作品である。そこには自然描写がない。というのはまだその作中で、自然が風景となっていないということである。しかも『伊勢物語』が現代においても文芸の傑作と感じられるわけは、大体において叙述の体に終始しておりながら、人間心理の描写が全体の上に萌え出ているということである。その創成的な舌足らずの描写が、おそろしい確かさで、われわれに心理風景を感じさせるのである。たとえば業平東下りの隅田川のところである。「その川の辺に群れゐて

思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守『はや舟にのれ、日も暮れなむ』といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにあらず¹である。京都の雅びな恋人を、口にはいわぬがだれもおもっていたのである。そのとき白い鳥がいるのを見て名を聞くと都鳥¹というのだというので、「名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」、という歌を詠んだ。そこで、みな²の者が泣いてしまったと結んであるが、ここの文の迫力は、事からの叙述というにとどまらないで、人間の心といったものの奥深く生きた姿を幻想せしめる魔力を持っているところから生まれている。これは心理描写というにはあまりに単なる叙述である。しかし叙述といふ切るにはあまりに風景的效果をねらっている。

けだし小説という言葉の概念がなんであろうと、私にとってはすこしもかわらない。十八九世紀からの西洋の学者や、明治この方の日本人が何十何百の小説の定義を下したところで、その人々は多かれ少なかれかれらの現代に拠つてものを見、ものを定義したのである。その立場が分かれば、それらの人々の下した定義の必然性や、不必然性や、その人々の文芸を見る眼の鋭さや鈍重さは、よく理解することができであろう。しかしそうしたことを抜きにして、幾十百の小説の定義を遍歴して歩いて見たところで、要するに絶対の定義や普遍性ある定義が生まれてくるはずはない。そうした非科学的なやり方には、実はじぶんですこしうんざりする思いもあるのである。だからもしそんな仕方³で、定義を作った人があるとすれば、とたんに眼の前でいまの私は別の定義を作⁴って見せることもできる。なぜといつて、その人はまだ発表してない定義は見る⁵ことができなかったからである。そして私はそんな小説論など出したためしがない。

つまり小説という言葉の概念がなんであろうと、私にとってはすこしもかわらない。けれども私どもが小説ということを考えるならば、それはあらゆる国や時代やの小説くさいものをみんな読んで、帰納的に考えるというのでは決してない。そんなことはできたとしたら小説という概念は流産するにきまつているのである。それとは逆に少なくとも

われわれは現代小説の觀念をもつて、過去の作品の寸法をはかるのである。現代小説の似姿を過去の作品の中にさがしもとめるのである。芭蕉がえらいから、芭蕉へ帰るといふのは虚偽である。芭蕉に似姿を発見しうるような姿をこちらが呈しているから、芭蕉がつかめるのである。つかんで夢中になると、こちらが芭蕉に似るかわり、つかんだ芭蕉は現代くさくなるのである。引力の物理的法則に敢然とそむけるような無理は、心理や文芸やの世界でも押し切れないのである。だから日本の古典に小説の、ことに長篇小説の問題を結びつけることは、本来一種の創作的興味にならない。けれども強いてしてみるなら、私はそれがただ平安朝と江戸時代とだけに許されそうな気がするのである。『伊勢物語』は小説の萌芽をもっている。心理風景の切断的な描写の上で。しかし、そこには自然の風景はまだ生まれてきていない。『源氏物語』がもし日本の長篇小説の祖だといひ得るならば、それは心理風景と自然の風景とが作を支えているからである。描写があるからである。

物語という言葉にかかわらず、すでにそれは語られる形態に別れを告げて相当のへだたりを持っている。語りものが聴覚から切りはなされて視覚にのみたよるようになったことは、当然表現技法の大改革を必要とした。その必要がどの程度に意識されていたのかいかなかったのか、私にはそれははっきり分からぬけれど、結果としては当然にそれが生まれてきた。

民間に伝承される説話の形態は、古から今にいたって大差がない。縁起の類も、寺僧に語られると絵巻に仕立てられたとよつて大差はない。それはむしろ絵巻の文章の方が、読むよりはいつでも篤信の衆の耳によびかけられるような形態で待機²させられているからであつて、かならずしも読むためのものではなかつたからに外ならぬ。お伽の衆に語られると、『源氏』の中の人物や、和泉式部、小式部でもが『今昔』『宇治拾遺』の中や縁起絵巻の中に出てくると同じ手法で述べられる。それはお伽草紙の姿を見ればすぐ分かることである。誓願寺の女たちが全国にかりひろめたという和泉式部の話なども、およそあの王朝日記の調子からは遠い、お伽ばなし風の形でであつたらう。な